

7

月

Jul.2026

沖縄開教本部通信
vol. 124

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

ハイサイ 沖縄



沖縄と民芸

(三) 論争する柳宗悦 「国語問題」

一九三九（昭和十四）年の年末、日本民藝協会主催の琉球観光団を引率して柳宗悦は第三回目の訪沖に出発した。「沖縄の貧しさについての聞きかされて」きた柳は、「沖縄が有（も）つ富」について知らねばならないと、この観光団を組織したのであった。ところが、この旅の途中、翌年一月七日の座談会で柳ら民藝関係者と沖縄県警察部長の間で予想しなかった論争が始まる。柳ら民藝関係者たちの沖縄語賛美に対して、「挙県的運動」として標準語の使用を推進しようとしていた県側は、学務部の名で「敢（あえ）て県民に訴う民芸運動に迷うな」という声明を一月十一日の那覇三紙『沖縄朝日』『沖縄日報』『琉球新報』に同時に発表した。柳宗悦の反応は速く、翌十二日には「国語問題に関し沖縄県学務部に答えるの書」を書き、十四日には上記三紙に掲載された。

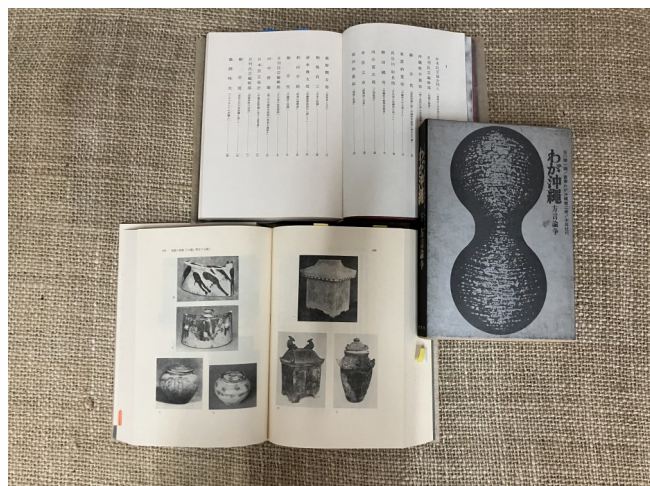
柳宗悦の主張はいたって単純な正論であった。「標準語も沖縄語も共に日本の国語である」。一方は中央語、一方は地方語であるが「国語と

して共に尊重される可（べ）きである」という見解であった。一方で「意義深き皇紀二千六百年を迎え」アジア太平洋戦争が近づくなかで、沖縄県の標準語励行運動は切迫したものであった。一九四〇年の柳宗悦の第四回訪沖のおりに実現した淵上房太郎沖縄県知事との面会（八月二日）では、柳の「方言を廃止させる意向なのですか」という質問に、知事は「そうです。標準語に更（か）えぬ限り此の県の発展はありません」「この県は日清戦争の時でも支那（中国）につこうとした人がいた位です」と答えている（柳宗悦の「手記」による）。軍国主義の皇国化のために沖縄方言撲滅によって沖縄の人びとのアイデンティティを空洞化させようとする国策があったことがうかがえる。

この一連の論争の中でとくに注目されるのは、柳宗悦が方言（問題）という語をあまり用いず、国語（問題）という語を多用していることである。これは標準語と琉球語を対等な「日本の国語」とみなす見地に立つものであるが、同時に「言語は民

族の精神、人権、習慣、延（ひ）いては文学、音楽等と密接にして必然な結縁」をもって地方文化を支えるのだという独自の柳の文化観によることが示されている。日本語はこうした多様な言語文化の複合であるゆえに尊重されるのだというのである。そこには今日の多文化主義の思想をはっきりと読みとることができる。現在の言語学研究は日本語の系統を本土語方言と琉球語方言の二つに大別するが、琉球語の重要な価値についても柳宗悦は先見の明をもっていたことがわかる。

柳宗悦の「国語問題」論争を特集している『わが沖縄 方言論争』（一九七〇年、木耳社）の箱と目次、及び『柳宗悦全集 第十五巻 沖縄の伝統』（一九八一年、筑摩書房）のさし絵。



【玉代勢法雲師 祥月命日法要】

五月二十三日、沖繩別院にて「玉代勢法雲師祥月命日法要」が執り行われた。

師は、沖繩県民としてはじめての大谷派僧侶であり、ハワイ開教使として生涯をおくった稀代の人である。

明治の初め、沖繩で解禁となった浄土真宗は、那覇に「那覇説教所」を設け布教に臨んでいた。そこに祖母に手を引かれて聞法に通っていた少年が、後の玉代勢法雲師である。

師は沖繩の中学校に進学し

沖繩は今！

「ハンセン病問題に

関する懇談会」

連絡会開催」

五月十一日から五月十二日の日程で、沖繩別院・読谷村・名護市愛楽園にてハンセン懇の連絡会が開催された。

沖繩別院では、回復者で地域で暮らす平良仁雄氏より回復者の会の活動報告と課題に關してお話いただいた。また、昨年戦後八十年をむかえたことから、読谷村では知花昌太郎氏(教化拠点我何寺)にビチリガマ(自然壕)を案内頂

た後、京都の真宗京都中学に入学し、東京の真宗大学へと進んだ。サンスクリット語に精通し、「華嚴經」の最初の翻訳を行ったひとりである。卒業後も研究を続けるが、病に倒れ、沖繩に帰ってから名護にあつた「名護布教所」で真宗をひろめた。その後、開教使の命を受け、ハワイに渡り「マカレー本願寺」を開き、移民の中でも特に差別されていた沖繩県人の地位向上に尽力した。

現在、マカレーの莊嚴は沖繩別院が継承し、師の念

き、何我寺では、「集団自決」により犠牲になったチビチリガマと、生き延びたシムクガマの人たちがおられたという話を聞いた。

二日目は名護市にある沖繩愛楽園にて、愛楽園交流会館の学芸員に話を聞いた。戦時中の患者作業(防空壕堀り)で、末端神経の感覚を失った患者たちが手作業に従事し、怪我をし命を失った事や、防空壕の中ですし詰め状態になり身動きが取れずすごした事、また園内の済井出中学校跡では、学ぶ喜びはあったが病

仏のこころを受け継いでいる。



長谷輪番による法話



法名軸



愛楽園平和ガイド 早田豪前にて

気を隠すために卒業証書を破った事、進学希望した高校で病気が理由で入学拒否された事などを聞いた。その後、資料館を見学し、納骨堂前で勤行をして園を後にした。

コラム 「浄土真宗との出会い」

長嶺 安一 沖繩別院 門徒

私は沖繩県宜野湾市で設計事務所を経営している者です。建築関係の本を読んでいると、以前から「他力」という文言が目について、どのような意味なのか調べると、自分以外の周りの人が自分を助けてくれることだと書いてあり、そうだと思うようになりました。

ところが最近「他力」とは仏教用語だとわかり、仏の力と人間社会に深く関係していて、人間関係の縁に深い意味があることがわかりました。現在私は七十七歳であります。それでも遅くはないと思います。仏教の教えを学びたいと思いました。幸いにも近くに東本願寺沖繩別院があり、十年ほど前に知り合った別院の職員の顔を思い出し、早速別院を訪ね、仏教についての話を聞き学びたいと伝えたとこ

ろ、毎週土曜日に土曜礼拝があり、一緒に茶話会も開かれていることを教えていただきました。

それから三か月、毎週通っています。仏教の法話はいいつも新鮮な驚きがあります。法話の内容は今までの知識とはまったく異なっていました。初めて聞いた内容に驚きとともに奥深さを感じます。また、法話後の茶話会が楽しみです。一人ひとりの会話の中にお互い相通じるものがあり、私にとって日々の業務とはまた違った、楽しい時間です。よい時間とよい会話、よい縁を大事にしていきたいと思っています。

感謝：南無阿弥陀仏！